

天 界

第九十四號

(第九卷)

昭和四年一月

“1929年”

さいふ此の年は火星を吾人の頭上に戴きつゝ、明ける威勢の好い年である。百八の除夜の鐘が鳴つて愈々新年を迎ふる元旦の午前〇時、試みに戸外に出て天空を仰げ、そこにはオリオンを中心として燦爛し輝やく冬の星々の中に、血のやうなもの凄い色の火星さ、碧玉のやうに澄んだシリウス星さが、共に「マイナス」等半の光りを競ふて相並び、全天空を壓してゐる。火星は其の後暫く「牛」座を逆行して1月末には留まなり、次いで順行に轉すると共に、地球からの距離も増して、春の頃、漸次、日の光の中へ消え去る。火星と共に金星も今年の初頭の宵天を飾る星であつて、2月初には最大離角、3月中には最大光輝となるが、其の後、急に日光の中に没し、5月以後は曉の星となつて朝起き者を喜ばせる。海王星が発見されて以來今正に83年、之れは同星の半週轉に當る。此の星の半生の學史を顧みて、太陽系の大組織の上に種々の新知識を綜合すべき時期であらう。永く向上し續けた太陽の黒點活動は今や漸く其の頂上を過ぎたらしい。今後は其の活力が徐々に減じ行く筈であるが、しかし尙二三年は注目を要する。今年は日食が二回ある。(月蝕は無い。)11月1日のものは金環食で、アフリカ大陸を横斷するに過ぎないが、5月9日のものは近來稀に見る長時間の皆既日食であつて、觀測地はアジアの東南端に限られてゐる。全世界の幾多の觀測隊がこゝに集中して、偉功を競ふこゝに豫期される。彗星界に於いてはダニエル、ペライン、メトカーフの三彗星が今年歸來する筈である。何れも軌道は多少不安定であるが、中にもペライン彗星の搜索は先年の「中村彗星」の問題を解決するため、特に重大な意味のものと思はれる。恒星界に於いて、駁者座エプ星は完全に其の極小光輝に達したと肯かれる。今1929年は天文理學界に於いて特に記念すべき偉傑クリスチアン ハイゲンスの生誕後正に300年の年である。土星輪の發見者、振子時計の發明者、望遠鏡の完成者、波動光學の首唱者、遠心力及び地球形狀の研究者として、第十七世紀の佛蘭學界に重きをなした此の學聖の記念は、東洋西洋共に天文物理學界の間に盛んに行はれるであらう。5月中旬には第四回汎太平洋學術會議が南洋ジャバに於いて開かれる筈である。(天文年鑑より)